

超下級

田中 愛子

Eテレの「100分de名著」を楽しみに見ている。世界の名著を、週に一回、ひと月一〇〇分をかけて紹介するという番組である。そこで先日とりあげたのがレイ・ブラッドベリの『華氏451度』。書物を読むことが禁じられた未来の世界の物語である。表題の華氏451度とは紙が自然に燃え出す発火点をいう。

ようやくに華氏で暑さを感じいるこの頃赤きTシャツを好む
永田和宏『華氏』

永田氏のこの『華氏』のあとがきでも触れられているが、『華氏451度』の華氏とはドイツ人学者フアーレンハイト氏の中国語表記に由来するのだそうだ。ちなみに中国語では「華倫海」と書く。アメリカでは日本と違い温度を表すのに摂氏ではなく、華氏を用いるので、古いアメリカの小説などで温度のことが話題になるとびんと来ないこともある。摂氏ではいったい何度なのかと知りたくなる。ところでこの摂氏も人の名前に由来することばである。こちら

はスウェーデンの学者セルシウス氏からとられたもので、その中国語表記「摂爾修斯」の頭の文字をとって「摂氏」と書く。記号で書くときは、それぞれ人物名の頭文字をとるから、°Fと°Cである。ちなみに先の華氏451度は摂氏に換算すると二三〇度くらいになる。

このように、日ごろ使っていることばに、外国の人名や事物がひそんでいるものがある。今ではあまり使わなくなつたが、半ドンもそうだ。ドンは日曜日を意味するオランダ語のドンタクから。半分の休日だから半ドンである。

「超下級の活躍」。Eテレの『華氏451度』に相前後して、朝の情報番組に登場したスポーツ紙の一面大見出しである。「どきゅう」の「ど」はカタカナ表記だった気がする。これは大リーグのエンジェルズで活躍する大谷翔平選手を評したものだ。投げては三振をとり、打つてはホームラン、塁にできればすかさず盗塁。ペーブ・ルース以来の二刀流だとか。とにかくすごい活躍だ。

私がかつて「超下級」は単に並はずれたなにかすごい状況のことだと思っていた。ところがこのことば、そういう意味もあるのだが、もともとは英国の誇る大型戦艦ドレドノートを上回る超大型艦を指して言ったことばなのだそうである。ドレドノート級だから弩級、それを超える強力艦だから文字どおり超弩級というわけで、そのことをなにかのきっかけで知つてとても驚いた記憶がある。